



カンボジアに学びの場を

室蘭市高砂町の海星学院高校(堺俊光校長)は、貧困や紛争などで学校に行けない東南アジア・カンボジアの子どもや大人のために、書き損じたり、未使用のはがきなどを回収す

る「世界寺子屋運動」のキャンペーンに取り組んでいます。生徒の有志が毎年ポスターを作製して支援の輪を広げています。(野村英史)

作製したポスターを掲げる海星学院高校の生徒たち



室蘭・海星学院高の生徒

世界寺子屋運動は「学びの場—寺子屋」を広げようと、日本ユネスコ協会連盟が1989年(平成元年)に始め、今年で30周年を迎えました。

世界にはさまざまな理由で学校に通えない子ども(6~14歳)が日本の総人口より多い約1億2400万人、学校に通えないまま大人になってしまい文字の読み書きができない人が約7億5000万人もいます。

寺子屋運動はすべての人が公平に勉強できる場をつくろうと、読み書きができなかったり、貧しい人が多いアジアの国々を主な対象に実施されています。

書き損じたはがきを切手に交換するほかに、未使用の切手や商品券、図書券、プリペイドカードといった金券などを集めて換金し、発展途上国に学校を建てたり、勉強するために必要な本や文具、教材などをかうために役立てられています。

たとえば額面62円の手紙はがきは手数料を差し引くと57円分の切手に交換可能で、カンボジアでは子ども1人が1カ月、学校に通うことができます。

海星学院高では2018年度(平成30年度)、2244枚を集めました。活動を始めた11年度からの合計は4万5273枚になります。

今年もポスター、広がる支援

同校では今年も生徒の有志20人が寺子屋運動に協力を呼び掛けるオリジナルのポスターを作製しました。大きさはA3判でパソコンのプレゼンテーション用ソフトを使い、同連盟から提供された写真に生徒一人一人が考えたメッセージを入れました。11月下旬から室蘭市内などを走る路線バスの車内や、大型店、公共施設に張り出されています。

数あるポスターのうち、校内選考の結果、ともに2年生の常盤百花さん(17)、小丸廉さん(17)の作品が学校代表作品となる優秀賞にそれぞれ選ばれました。

常盤さんは「カンボジアの子どもたちが夢を持てるよう、はがきの力で救われるようになってほしい」、小丸さんは「識字教育を受けていない大人たちの存在を多くの人に知ってほしい」とポスターに込めた思いを話してくれました。

書き損じはがきなどぜひ

はがきなどの寄付は、海星学院高に直接持ち込む(平日の午前9時~午後4時半)か、郵送でも受け付けています。期間は来年2月27日まで。このほか公共施設などに設置した回収箱でも受け付けています。